

質的調査法の授業

武者小路澄子

図書館情報メディア研究科助教授

質的調査法は、図書館情報学群では本年度から始まった新しい授業である。先学期に終えたばかりだが、手応えはますますだと思う。最後に受講生に書いてもらった評価も「先生は初めてだと言っていましたが、どの授業よりも充実していました」「いろんなことが学べて参考になった。今後に役立てたい」「卒研で本当に困っていたので助かりました。習ったことをいかせるようがんばります」「卒業研究を実際にやってみると、また質問が出ると思うので、そのときはよろしくお願いします」と、書いてくれた人に限ってのことかもしれないが、やりがいを感じさせるものが大半だった。

質的調査法の授業の概要

「質的調査法」という用語は、しばしば「(定)量的調査法」という用語の対として用いられるが、要するに、この「質」というのは“数量では捉えきれない、あらゆる側

面”と考えてよい。

一般に、量的調査法は、自然科学研究をモデルとした精緻な統計的・計量的的研究法と言われ、そこでは実証主義の観念を基盤とした仮説検証型の分析方法が提示されている。広く社会現象に対しても、それを説明する仮説を設定して、計量的に検証していくことを目指すのだ。それに対して、「質的」研究においては、例えば、人数はごく限られてしまうにせよ、人々の“生の”声や姿と直^{じか}に、あるいは詳細に向き合っていくことから、立ち現れてくるものを探ろうとする。さらに、そもそも社会現象と呼べるものがわたしたちの目にどうやって《現実》として映っているのか、わたしたち一人一人が、あるいはわたしたちお互い同士が、そこにどのような意味を見出し、どういった行動をとっているのか、等を背景的な問題として問うことが多い。言ってみれば、社会現象を通しての、問題発見型、問

題解明型、あるいはそもそも“問題とは何か”の考察を促す調査法なのだ。研究と言うと仮説検証型を連想するような学生たちに対しては、「とりあえず、世界を眺める別の眼鏡をかけてみて下さい」とお願いすることから始めなければならない。

しかし、あまり難しい話から始めるより、せっかくなら、生き生きと、流れるように理解してもらいたい——調査者自らが現実接近して、調査対象と体当たりでぶつかって（あがいたりもするうちに）、具体的に詳細なデータを得て、その醍醐味を発表できるというのが、質的調査法の良いところなのだから——という思いから、『理論に詰まる前に身近な具体例を』『調査の技法が空転する前に演習を』と心掛けて、授業予定を組んだ。

最初に、「質的調査法とはどのような方法か」について概説し、次いで「調査方法とその実践、具体例」の話に入る。ここでは、具体的な調査方法を取り上げ、その目的・設定の仕方や手順・留意点を挙げる。扱ったのは、フィールドワークを中心に、インタビュー調査、参与観察法、ライフヒストリー、オーラルヒストリー、資料調査等だ。各々の調査方法について、出来る限り広範囲の具体例を挙げるようにし、なおかつ受講者にとって身近な例も加えるようにした。例えば、エスニック・スタディとして

なされたジェンダーやマージナリティーの研究から、日本人ジャーナリストが行ったホームレスの人々のルポ等まで話を広げ、また、過去の卒業研究で「コスプレの世界」を体当たりで参与観察した優秀作を紹介し、受講者に関心の高い「図書館」をテーマに、ライブラリアンの表情やしぐさが利用者に与える影響はどうすれば調査できるのかを問うといった具合だ。また、大勢の受講者が関わっていくと予測されるインタビュー方法については、調査計画書を書いた上で演習を行い、自己採点もしてもらった。一回の演習では満足するまでには行かなかったらしく、「次はもっとうまくやりたい」と全員の熱意が感じられた。

調査方法について話した後で、一段落おいて、少し理論的な話——。この段階で、皆「質的調査法って楽しいと思うけど、どうやって成果をまとめるの?」「調査者の主観も大切にするっていうけど、研究は『客観的に』やるものでは…」といった思いを持ち始めている。そこで、「主観と客観」「理論」「演繹法と帰納法」といった研究に関わるキーワードをまとめていく。加えて、研究上の立場（例えば実証主義や社会構成主義）や方法論（例えばトライアングレーション）について概説を試みた。

やや難しい(?)話を挟んだ後は、調査と切っては切れない、「分析方法とその実

践、具体例」の話だ。データとその解釈の問題にふれた後、取り上げたのはコーディング、KJ法、複数人で切り口を見つけるセッション、そして会話分析やディスコース・アナリシス、映像資料の分析法等だ。ここでも演習を試みた。

最後に、質的調査法というのがどのような研究方法であるのか、その目標や意義、成果、そして研究上の倫理や、成果を発表する上での留意点についてまとめた。質的調査法は、「主観的」「曖昧」「多義的」「全体を説明していない」と批判されることが多い。しかし、そうした方法やその成果がなぜ必要であるのか、なぜ現実に対する新発見の面白さや、「目から鱗」の驚きや、感動を与えてくれるのかは、正確に理解し、きちんと踏襲してほしい。

途中から、聴講を申し出る大学院生（前期・後期）が増え、「1限だけど絶対遅刻しない」「条件は、学部3年生と同じ」とつぶやねたが、最後まで受講し、発言もしてくれて、全体の良い刺激となった。

図書館情報学への希望の光として

図書館情報学群の学生のために、この授業が開かれたことを、わたしは真実、“希望の光”のように感じている。

学問としての図書館情報学は、その根幹に、「情報」や「知識」の探求という課題を

抱えている。また、文明社会において人々が様々な情報や知識を人間の遺産として蓄え、体系化して、後続の人々にも探求できるようにしてきた代表的な機構として、「図書館」が存在する。図書館情報学において、図書館を初めとする多様な現場での情報や知識のあり方を探り、人々の探求を支援し、時代に即し“人間として”必要な情報や知識のあり方を学問的に考究していくのは、とても重要だと考えている。

図書館情報学群の掲げる目標やカリキュラムを見る限り、しかしながら、学問の姿は、ここ10年に満たないうちに激動の変化を遂げ続けている。あっけにとられていくうちに、学問の全体像さえ掴みきれなくなってしまった。薄ぼんやりにししか把握できていないが、現時点では「情報」の処理に関わる技術や技術開発といった領域がダントツに際立ち、あとは「知識」に関わる経営論に括られる諸領域が目立つ。学生向けに、就職という“出口”に向けての即戦力となる“使える”授業が奨励される。

いや、ちょっと待ってほしい。決して回顧に浸るつもりはない。様々な“改革”の前向きな方向性も理解しているはずだ。しかし、一つだけ声に出すなら、この変化の波の中で、＜「情報」や「知識」とは、デジタル化し、通信可能で、ネットワークで共有可能なものである＞という前提がど〜ん

と大きなお尻をおろして座ってしまった。しかも、「情報」「知識」と人々との関わりは、“使ってなんぼ”“もっと早く、もっと便利”の経営の思想、すなわち合理化や経済主義という価値観を背景に語られることが多くなってしまった。

待って下さい。人間が探求し続けてきた「情報」や「知識」は、すべてデジタル化可能なのか、あるいはデジタル化によりどんな変化をこうむるのか、一度、立ち止まって考えてみる必要は無いのか。この世界について、人が何かを「知る」ときに、画面上の文字を通して知ることもあるが、手痛い経験から人生における大いなる教訓を得たり、命がけで登山してその山をまるごとの自分で知ることもある。人としてその全てをかけて、からだ全体を通して知ることでもあるのだ。人間の「知る」という行為は、人間の身体性や経験のしくみをはずしては、十分に扱うことは出来ない。そこには、超アナログで、関係性の中で成立したり、語り得なかったりする（が、わたしにはワクワクするような！）「知り方」があるのだ。

同様に、「情報」や「知識」を扱う上で「より多量に／スピーディに／効率的に／経済的に」という価値観だけで扱えるのかについて、一度議論しても良いのではないのか。人間にとって本当に必要な、そして未

来に向けて探求していくべき「情報」や「知識」は、本当のところ、何であろう。グローバリズムの浸透、世界の貧困と格差、戦争やテロリズム、環境や自然の破壊、社会不安、新しい世代の抱える問題、等と向き合わざるを得ない現代において、問わなければならないのは、これから人間としてどこへ向かうかであり、そのために必要な「情報」や「知識」、そしてこれらをどう使うかという「叡智」のあり方ではないだろうか。

図書館情報学には、大切な学問の対象、「情報」や「知識」を、この範囲まで翼下におさめて考究してもらいたい。そのためには、特定のフィールドや人間に接近し、観察し、生き生きとした《現実》を汲み取ろうとする質的調査法の授業で展開できることは、“希望の光”なのだ。「図書館」という現場で、何かを求めて来た市民とライブラリアンとがどのように接点を持ち、やりとりしていくのか。特定の問題を抱える人間が、「情報」を得るという契機によって、何を発起し、生きることとどう向き合っているのか。沢山の事例に取り組んでももらいたい。学生にこそ、そこで“生身の”人間の＜生の現実＞や、社会が切迫して抱える諸問題と出逢い、そこから学問を見つめ直してもらえる気がするからだ。

（むしゃこうじ すみこ／図書館情報学）